

令和 8 年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第 75 回会議(三分野合同)

所属機関・部局・職名： 東京大学大学院 薬学系研究科 薬科学専攻 博士 3 年

氏 名： 栗山 摩衣

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3 名程度)を挙げ、記載してください。〕

講演では、受賞に関連した研究内容について伺えたのはもちろんのこと、そこに至るまでの苦労話や裏話などを聞くことができました。印象的だったのは、ノーベル賞受賞者が、失敗や試行錯誤を経たり、研究内容が世間から認められない時期もあったりといった自らの弱い部分を、若手研究者にオープンに共有されていた点です。ノーベル賞受賞者を、雲の上の存在としてではなく、人として身近に感じられたのが非常に新鮮でした。身近に感じたとはいえ、受賞者が一線を画している素養は、サイエンスに対する並外れた好奇心、探究心および、上手いかわない時期であっても人生を賭けて自らの問いを貫く芯の強さだと感じました。どの受賞者の講演の根底にも、他人に追従するのではなく自身の信じたサイエンスを追求することの大切さが強調されていました。これらの講演を聞いて、非常に刺激を受けたと同時に、純粋にサイエンスを楽しむという気持ちを大切にしながら日々邁進すれば、彼らのように世界的な研究ができるかもしれないと勇気づけられました。今後の研究生活においても折に触れて受賞者の言葉を思い出し、糧としたいと思います。特に印象的だった受賞者は以下の 3 人の先生方です。

1. Katalin Kariko 先生(2023 年生理学・医学賞)

Kariko 先生は、mRNA の基礎研究から mRNA ワクチンの臨床応用の道筋を開かれました。仕事を 3 回解雇されたというキャリアのアップダウンや、パートナーなど人生観についてもお話され、等身大の姿を感じられました。人柄的にもとてもチャーミングな方で、ますます憧れました。

2. Mario Capecchi 先生(2007 年生理学・医学賞)

講演では、現在取り組まれている Hoxb8 という脳における不安関連分子についてお話しされました。90 歳近い今も現役で、10 年ごとに分野を変えながら研究されているということで、好奇心から生まれるパワーに圧倒されました。

3. Avrum Herskho 先生(2004 年化学賞)

グラントの獲得ではなく、好奇心が中心にあるべきというお話をされ、ハッとしました。普段の研究生活では競争や評価を意識することもあります。講演を通して自らの研究に対する原点に立ち返ることができました。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカッション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

ノーベル賞受賞者と聞くと最初は身構えてしまっていました。しかし、受賞者の先生方とほぼ一日中同じ環境で親しく過ごすうちに、どの先生方も非常に気さくで人間的にも素晴らしい方ばかりだということを感じました。ノーベル賞受賞者だからといって若手研究者に対して威張ることもなく、共にサイエンスに取り組むものとして対等にディスカッションしたり、私たちからの素朴な質問にも丁寧に応じていたりする姿が印象的でした。受賞者との交流を通して、一人一人の先生の生き方に触れ、私の理想の研究者像が明確になりました。ひいては科学に関わるものとして何を成し遂げたいかについて、広い視野から考えることができました。今回関わった先生方のようになれるように、研究面での向上はもちろん、人間的な成熟も目指して研鑽を重ねたいと思います。特に印象に残った受賞者は以下の3人の先生方です。

1. Craig C. Mello 先生(2006 年生理学・医学賞)

私は Mello 先生の Science Walk に申し込み、Mello 先生とリンダウの美しい自然の中、密な距離感でディスカッションする機会に恵まれました。芝生の上にブランケットを敷き、10 人程度で輪になって先生にたくさんの質問をぶつけました。Mello 先生が高校生の時に読んだ新聞記事をきっかけに遺伝学者を志したという話から、RNA 干渉の発見という基礎研究の知見が現在では治療法として目覚ましい進歩を遂げているという話まで、お話好きな Mello 先生にたくさんのエピソードを聞かせていただきました。私は日頃、臨床応用に繋がりたいという思いで基礎研究に取り組んでいるので、実際にそれを成し遂げた Mello 先生と直接お話できたことは何にも変え難い経験でした。今後の研究生活において、自らの支えになるはずです。

2. Ada E Yonath 先生(2009 年化学賞)

Yonath 先生の Nobel hour に参加しました。Nobel hour とはノーベル賞受賞者が、若手研究者からの質問に答える完全 Q&A 形式のセッションです。Yonath 先生は同じ女性研究者ということもあり、研究者として、また母としての人生を語られていたのが印象的でした。一方で、女性研究者であることをどう捉えていたか?といった研究のジェンダーギャップに対する質問に対しては、特に男女の差は感じたことがないといった回答でした。私自身もまた、世間からの風向きをものともしないほどの確固たるリサーチクエスションを持って、研究に励みたいと感じました。

3. Morten P. Meldal 先生(2022 年化学賞)

最終日のボートトリップのダンスでは、参加者の輪の中心になって踊っている姿が印象的でした。お話しに行くと、気さくに写真撮影にも応じてくださいました。研究だけでなく、何事にも前向きなエネルギーで取り組まれている方だということを会期中の様々な場面で感じました。私も周りにポジティブな影響を与えられる研究者でありたいと思いました。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

リンダウ会議に参加するアドバンテージはノーベル賞受賞者との交流だけでなく、Young Scientist と呼ばれる諸外国からの若手研究者との交流にあると思います。彼らは、リンダウ会議という機会を存分に活かして少しでも多くのことを吸収しようという意欲に溢れており、早朝から帰りのバスの中に至るまでずっとネットワーキングしている姿が印象的でした。そうしたアグレッシブな姿勢はもちろん、彼らの研究面での優秀さにも圧倒されました。たとえば、研究分野が異なる人と話したときにも、私が簡単な研究紹介をただけで相手から鋭い指摘やコメントが返ってきました。研究分野が比較的近い参加者とは、コーヒーチャットから共同研究の可能性に話題が展開し、連絡先を交換すると同時に、互いの研鑽を誓い合いました。また、諸外国の参加者の視野の広さにも驚きました。具体的には、パネルディスカッションで Global perspective from young scientists というものがあり、その中では新興国出身の同世代の研究者が登壇していました。彼らは、メンタルヘルス、マイクロプラスチック問題、気候変動といった世界規模の課題を意識した上で、自らの研究テーマに取り組んでいるということを語っていました。私自身は、普段の研究生活では目の前のことで頭がいっぱいになってしまいがちです。しかし、彼らのように常にビッグピクチャーを頭に思い浮かべ、自らのサイエンスと社会との関わりも意識しながら研究に取り組もうという考えになりました。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

今回は JSPS 経由で 11 人、他機関からのノミネートで 2 人、計 13 人の日本人の方が参加されており、その全員とお話することができました。英語でのソーシャルに疲れた時や、母国語でほっと一息つきたい時など、慣れない異国の地において同じ日本人研究者の存在は大変心強かったです。滞在先のホテルが同じ参加者の方も多く、会場の内外での有意義な会話から、まるで同志のようなあたたかい信頼関係が構築できたと思います。研究のお話を伺うと、分野は様々でしたが皆さんいきいきと語ってくださるのが印象的でした。加えて、リンダウ会議のようなイベントに参加するだけあって、十人十色ながら共通してパワフルな生き方をされていて、刺激を受けました。ポスドクや海外留学をしている方や、研究と家庭を両立している方もいらっしやり、キャリアの上でも人生の上でも一歩先を歩む先輩方の姿は自らの将来を考える上で非常に参考になりました。皆さんと関わる一瞬一瞬を通して、研究のモチベーションが向上しました。国内外で活躍し、まさしく日本の未来を担う若手ホープの皆さんと親しくなれたことは、私にとって一生の財産です。リンダウ会議の後、国内外それぞれの所属先へと戻りましたが、リンダウで築いた絆は今後も大切にしたいと感じます。皆さんと肩を並べられるような研究者でありたいとの思いを胸に日々研究に取り組んでまいります。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

1. Grill & Chill

ボーデン湖畔の公園で、美しい湖を眺めながら夕食をとるソーシャルイベントです。リンダウ市民の方も参加されており、リンダウ会議という歴史あるイベントがリンダウ市にとっても特別な存在であると感じることができました。相席した若手研究者たちとそれぞれの国のことや研究のことなどを語りあった時間は一生色褪せることのない思い出となりました。

2. Focus talk

ノーベル賞受賞者があるトピックに対して行うパネルディスカッション形式のトークです。特に、Fighting disease: From fundamental discovery to lifesaving medicine というタイトルで行われた Focus talk が印象に残りました。私はまさに臨床応用に繋がるような研究をしたいと考えているのですが、まさにそういった研究を成し遂げてこられた先生方が一堂に会するセッションは感動的でした。

3. Bavarian evening

最終日の前夜の夕食時、バイエルン地方の伝統料理を音楽とともに楽しむイベントです。伝統衣装の着用が推奨されているため浴衣を着ていったところ、人気者になりました。世界における日本のプレセンスを高めるためにも、浴衣を持っていくことをぜひおすすめします。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

リンダウ会議参加の具体的なメリットとして、大きく3点を挙げます。まず、普段の閉じた研究環境を離れて、自分自身が世界の研究者コミュニティの一部であると感じられたことが大きなメリットだと感じます。専門も国境も越えたリンダウ会議だからこそ、自らを世界において俯瞰して位置付けることができました。ノーベル賞受賞者や世界中から選抜された若手研究者を前にして、自らの不足を感じる部分も多々ありましたが、曲がりなりにも対等に議論し、同じ空気を吸い、濃密な一週間を過ごした経験は大きな自信となりました。この自信は、これからの研究活動において私を支えてくれることと思います。次に、受賞者たちの人生やお人柄に触れたことにより、研究に対するマインドセットを確立できたことも収穫でした。好奇心を持ち続けること、実験がうまくいかなくても楽観的であること、世界の諸課題に研究者として取り組むこと。これらは普段の研究室生活では明文化されにくいものであるにも関わらず、研究者としての土台を構成する重要なマインドです。私は若手のうちにこれらの考え方を身につけられたことを幸せに感じます。最後に繰り返しになりますが、優秀な若手研究者たちとの人脈もリンダウならではのメリットです。600人ほどの世界中の若手と交流できるのはまたとない機会です。海の向こうにもサイエンスが広がっており、言葉は違ってもサイエンスで繋がることができると実感できました。これらのメリットを享受したことにより、いつもの研究室に戻った後も見える景色が変わりました。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

リンダウ会議への参加を通じて得られた収穫を、自分自身の研究、そして次世代へのインスパイアという二つのアプローチから日本国内に還元していきたいと思います。まず、私自身が現在取り組んでいる研究に邁進し、最終的に研究成果を出すことこそが日本社会への還元に関わると感じています。私自身は、認知症の新規治療法の開発を志向した基礎研究を行っています。それらの研究に取り組む上では、一筋縄でいかないことも多いです。しかし、今回吸収したようなマインドセットで粘り強く研究に向き合うことで、将来的には研究成果の臨床応用という形で日本国内に恩返しできるものと確信しています。また、次世代のインスパイアに関してです。ノーベル賞受賞者がそうであるように、私自身がロールモデルとなり後進を育てることで社会に与える影響を何倍にも高められるはずです。身近なところでは、所属する研究室や大学で良き手本となれるような振る舞いを心掛け、私が先人から受けた学びを背中であげていきます。それだけでなく、リンダウ会議参加の経験を所属大学で発信することも取り組みの一つとして行います。こうすることで、より多くの日本人若手研究者がリンダウ会議を通して成長するきっかけを生み出し、究極的には日本の科学界をますます盛り上げていきたいと考えています。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

できるだけ具体的に文章を書きましたが、会場での熱気は行った人にしか分かりません。世界の躍動する科学をぜひ肌で感じてください。普段の研究室を飛び出し、価値観の枠組みを変えることで、今後の人生を支える一生物の出会い、経験を掴むことができます。リンダウ会議は他にはない一生に一度の機会です。私は日常の研究生活に戻りましたが、確実に景色の見え方が変わりました。それくらいリンダウで一週間は人生の中で色濃く残るものです。リンダウ会議は一過性のイベントではなく、人生を変える経験であると胸を張って断言できます。少しでも興味があれば迷わず挑戦してみてください。この文章を読んだ方の背中を押すことができれば幸いです。実用的なアドバイスとしては、ノーベル賞受賞者の顔と名前、研究内容を簡単でも頭に入れておくといいです。思いがけないタイミングで席が隣になった時にすぐに話し始めるために大切です。また、社会課題などのトピックに対する自らの考えを持っておくことをおすすめします。日本人は議論慣れしていないことが多いため、諸外国の弁の立つ参加者を前にしては意見を述べることを遠慮しがちです。

末筆ながら、本会議の参加にあたりご尽力くださった日本学術振興会のみなさま、およびリンダウ会議本部のみなさまに心より感謝申し上げます。この経験を糧としてこれからも研究に励んでまいります。ありがとうございました。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)